

作者のすぐ近くまで来ていることを暗示して楽しい。

夕さりつ方の枯れ田に白鳥のみてしらゆきのごとく
かがやく
本田一弘

雪のない枯れ田で餌をさがす白鳥。雪のない雪国・福島
島の冬景色である。初句「夕さりつ方」は、平安朝の蜻蛉
日記などに出てくる古語で、白鳥がふと千年も昔からそ
こににいるような気分にさせてくれる。

ガンバルとガマンは少し似てをりぬ肩甲骨を寄せて
開いて
藤田紀美子

頑張ったあと、ほっとして胸を反らしたりしている場
面だろう。なるほど、頑張るも我慢も、その後ほっとし
て胸をそらせたり胸を抱いたりする。

子を持たぬ弟夫婦「獅子丸」と名付けて縞の猫を飼
ひゐる
太田富美恵

一首に物語を抱いた歌として注目した。ここにはまだ
まだ語られていない弟さんの家の物語がありそうだ。読
者はそんな思いにさそわれて、たとえば獅子丸は十着も
猫用の服を持っているとか、獅子丸はもう十五歳にも
なっているとか、勝手な物語を想像したりする。

袋帯はプレスのみとす小皺取り巻紙付すれば綺麗に
ならん
岡部和美

今月の作は、和服の仕立て、直し、洗濯などを引き受
ける仕事の歌である。着物のことは詳しくないのでよく
分からないが、職業の歌、仕事の歌が少なくなっている
昨今、注目して読んだ。この一首は、疲れた感じの袋帯
をリフレッシュする仕事らしい。具体性が持ち味。

七歳と七十七歳ならび立ち娘のスマホにVサインす
る
稲垣国男

親子三代が写真を撮りあっている場面である。なかな
か工夫された表現で、読者は的確に人間関係、場面を思
い浮かべることができる。数詞をうまく使っている点が
ポイントだろう。

夕されば高校生で満室となる学習室に着膨れてわれ
加利川友子

高校の職員として仕事をしておられるのだろう。ざつ
と五十人ぐらいいはいるのだろうか。自分以外は全部高校
生という、あらためて考えてみれば不思議な場面を、外
側から客観的に描き出している。

木製の三角定規を境にし数学教師と机を分かつ
今泉摩美

教員室の机の仕切りである。多数の本や書類が積まれ
ている二つの机の境界線に、大きな三角定規を立たせて
あるのだろう。お互い侵入しないように、あふれださな
いように。なんとなくユーモラスな感じがうれしい。

当主が死にて跡地に五軒の家が建つ大きな桜は伐られ
たようだ
宇都宮とよ

近所では有名だった大きな桜で知られた旧家だったの
だろう。当主はどんな人だったのか？ 遺産相続人はい
ないのか等々。これも一首が抱く物語が気にかかる一首
である。過疎で空き家だらけの地方が増えつつある一
方、東京などでは、ますます土地が細分化されて、広い
敷地の家はどんどん減ってゆくようである。